吉田有理　福島民報　連載コラム

圏外のアンテナ

[幼いプライド]の巻

　ある夕方、東西線でスマホが震えた。見ると、得意先が早急にコピーをほしがっている。仕方ない、次の駅で降りて仕事するか。

　駅前のマックに入って、列に並ぶ。先頭にはサッカー少年が3人。二番目はジャージの上下を着た、腕っ節の強そうな 30歳くらいのカップル。その次がわたし。列が進まないのは、少年たちが原因らしい。

　見ていると、合計額が出るたび、ドリンクのキャンセルや、ポテトのサイズ変更を繰り返している。店員はスマイルを絶やさず根気よく応対している。

　他の店に行こうか？　と考えていると、カップルの女性が「おまえたち、足りないのは、たかだか百円なんだろ？　やるよ。気にすんな」といって、カウンターに、ホイッと百円玉を転がした。

「いいんですかぁ〜。じゃあ、君たち、ここは甘えちゃおっか？」　と子どもらに向かって、取りなす店員。

　だが男の子たちは、頑なに辞退。その態度に、「いいよ。わかったよ」といって、女性は百円玉を引っ込めた。

　順番がくると、彼女はポテトのＬをひとつ余分に買った。そしてそれを少年らのテーブルにポイッと投げ出し、「モノならいいだろ。ほらよっ」といった。

　ようやくわたしも一安心。隅っこの席で、ノートパソコンをパチパチと打ちはじめる。

　数分後、横目で見ていると、帰りかけた少年たちが、カップルの席に向かってゾロゾロと歩いて行く。そして、ポテトの袋を無言で突き返した。

　（まさか、一口も食べなかったの？　あ〜あ、きっと冷えちゃったよね……）

　背中越しになった女性の表情は見えなかったが、帰り際、男性がポテトを勢いよくゴミ箱に投げこむところはよく見えた。

　残念！　ストレートな人情と幼いプライドは、思いのほか仲が悪いのだ。

　気が付くと、仕事の方も、残念！　と叫びたいほど、進んでいない。わたしは、慌てに慌ててしまった。

=２０１９年２月２２日掲載=

トレイのシートには、東京マラソン・チャリティの告知が。人助けはむずかしい